

# 私の出会った

## 高野公彦

# 歌人

高野公彦さんはこわい人。高野公彦さんはやさしい人。どちらも真実だ。そして、誰もが認める凄い歌人であることも。

私は第一歌集『びあんか』の時、高野さんに解説を書いて頂き、いろいろのことを教えて頂いた。楽しく、貴重な経験だった。

高野さんは伊予の国の人である。正岡子規や大江健三郎と同郷だ。西国の風土への愛着が強く、荒々しい東国の人や暮らしを批判されるのがユーモラスで面白い。特に食べ物の話が多いのだ。関西はうどんが中心だが、東京に来たら蕎麦ばかりで、食べてみたら硬くて実に貧しい土地だと思ったという話や、納豆などという妙な物を食べる関東人の気が知れないという話で、特に珍しい意見ではないが、高野さんのやわらかな声と表情が加わると、実に味わい深く受け取れる。納豆は、本



「NHK歌壇」番組出演時の高野公彦。

## 水原紫苑

当はひそかに食べているそうである。

男性歌人の中でも、高野さんほど女性の美しさを讃えて歌い上げる人はいないだろう。

よく使われるのは「女人」という言葉だが、まさに女人讃仰というべき境地である。

いかにもクラシックな昔の大和撫子ばかりが対象かと思うとそうでもなく、現代の少女たちの弾むような魅力にもきちんと照準が合っている。現在は青山学院女子短大の教授になられたので、しばしば学生たちが歌に登場するが、高野さんの手にかかると、何でもない少女が観音様のような光を帯びるから不思議である。

第四歌集『雨月』は母上の病と死を中心にした、大人の母恋いの歌集だった。女人に向けるまなざしの源には母への思いがあるのだろう。それ自体、男性としてきわめて普通の

事柄だが、高野さんの場合は何故一種の聖性をもたらすのか、今後よく考えてみたいところだ。

高野さんのご家族は奥さんとお嬢さん二人である。いつかも座談会で栗木京子さんが指摘されていたように、妻恋いの歌は意外に少なく、娘恋いの歌もごく少ない。たしかに妻恋いはもつと歌われてもいいと思うが、家族をあまり歌わないのも高野さんらしい特色だという気がする。つまり、家庭を営んでいることには関わりなく、魂はつねに放浪している感覚なのだ。妻や子を捨てたり、旅に暮らしたりする無頼とはちがう、精神の無頼の感覚だと思う。もしかして、先ほど述べた女人讃仰にともなう光も、ここが源なのかも知れない。

高野さんは意外に（ごめんなさい）お洒落な方なのではないかという意見も、最後につけ加えておきたい。目立つ服装は決してされないが、渋いグレーなどで統一されてシックである。これからますますお洒落も磨いて頂きたく、ファンとしてお願いしたい。

（みずはら・しおん「中部短歌」所属・「NHK歌壇」番組進行役）